タンポポだより

vol.42
2022 秋号

―― 友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌 ――

すずき出版発行「心のうたかれんだあ」(平成7年版)より　詩／坂村真民「遠い雲」　画／海野阿育

坂村真民記念館
Sakamura Shinmin Museum

坂村家のアルバム

vol.12

日光菩薩と月光菩薩

日光月光

日光を吸飲し
日光菩薩となられ
月光を吸飲し
月光菩薩となられた
この二菩薩の
なんという
美しさよ
優しさよ
合掌して
立ち給う
二菩薩に
合掌して立つ
このひとときの
うれしさよ
ありがたさよ

坂村真民歌集「石笛」より

われひとり入りてをろがむ法華堂
暗きみ堂を香は流るる

千歳經るみ堂の扉おもおもし
きしむ響きの身ぬちにぞ泌む

学生時代、父(真民)は節約のため帰省時はいつも鈍行列車でした。三重県から熊本県まで何時間かかったのでしょう。線路は奈良県を抜けています。紹介する二つの短歌は、奈良で途中下車して寺に参り、仏像を拝した時の感動を詠った若かりし真民の作です。

詩に登場する日光菩薩、月光菩薩(がっこうぼさつ)は、奈良公園内若草山の麓にある東大寺法華堂に祀られている薬師如来の左と右脇侍を指しています。後年この詩が生まれ、学生時代に短歌が詠まれときのことを、真民はこう記しています。

「今も鮮明に浮かんでくる仏さま方、とりわけ大きな日光、月光像は美しくて、その合掌された手が、わたしに向けられていることを知った時、この身が熱くなってくるのを覚えた。わたしは、その時から、手に魅せられたと言ってもよい」と。

そして約30年後、真民も短歌から詩作へと移ってゆき、四国松山宝厳寺の一遍立像に接した時、再び手の持つ美しさ、清さ、尊さに魅せられるのです。「菩薩とはちがって、生きている人間の手である。その人間の手を、あそこまで高めた人を、わたしはしらない」と。そして一遍上人を尊崇し、そのあとを継ぎたいと願うようになりました。

次にもう一つの短歌について、父が大好きで子供たちによく聞かせてくれた話を随筆から引用します。

「薬師寺を訪れたのは…(略)…境内にはわたし一人であった。もう扉はしまっていた。でも門番の人は大きな鍵で開けてくれた。そしてわたしに一本の大きなローソクを渡し、火をつけてくれた。わたしは独り中に入った。巨大な仏像の影が、ローソクの光によって動くのが、わたしには何とも言えぬ感動であった。わたしが神道の学校に入りながら、仏教に心ひかれて行ったのも、薬師寺でのこうしたふしぎな縁からであったろう。」

これで、もう片方の短歌が奈良市西ノ京に

位置する薬師寺（金堂の御本尊は薬師三尊像）での体験から生まれたことが解りますね。もう既に閉まっていた扉、開けてくれた大きな鍵、火がついた大きなローソク、父は思い出しても感極まる様子で……。

さて前にもふれましたが、短歌との出会いを少し詳しく見てみましょう。まず万葉集に深く入っていき、次第に現代短歌に近づいて行きました。やがて一生を歌に生きようと決め、一徹な性格から師を探し求めます。当時は、キラ星の如く短歌人が現れていて、「明星」を創刊した与謝野鉄幹・妻晶子らの浪漫主義運動、伊藤左千夫・斎藤茂吉・島木赤彦らのアララギ派等々。しかし真民が選んだのは、岡野直七郎でした。岡野先生は、東京大学の政治科を出ながら、道玄坂にライスカレーの店を出され細々と生計を立てておられました。そういう世捨て人のような先生に心ひかれて終生の師として仰ぐことは、野に生きようとする真民ならではのことでしょう。18歳で学内の雑誌に短歌を投稿し始め、20歳の9月に岡野先生主宰の短歌結社「蒼穹（そうきゅう）」に入社、その後の約20年間師事し続け、三十一文字の文学に生命を燃焼させて行きました。

一生で一番多感な時期、その後の人生の片鱗が見え隠れする学生時代を、真民の「伊勢の海」という一文で締めたいと思います。

「伊勢での4年間の生活は学問というよりも、むしろ人生を知らしめた。いやもっと大きな自然を知らしめたといってもよい。古い国がもつ海と山と川との美しさに触れて、わたしという一個の人間を作り創（はじ）めたといってもよかろう。」

文／西澤真美子

参考：引用文の出所
随筆集『念ずれば花ひらく』、『愛の道しるべ』、（サンマーク出版）

表紙の詩

遠い雲（53歳）

あなたと歩いていると
もろもろのものが
相寄ってくる
山も鳥も
遠い雲までも
近づいてくる

天地一ぱいの
広々とした
豊かな心になってくる

この詩は、坂村真民が生涯敬愛し続けた、杉村春苔尼先生のことを詠った詩です。

昭和37年9月28日の思索ノート「タンポポ堂日記」には、「春苔先生がわたしの師であり、わたしはその直弟子である。先生が観音であり、地蔵であり、わたしにとっての阿弥陀仏であり、天照大神なのだ。」とあり、その後にこの詩が書かれています。真民の先生に対する想いが凝縮された詩と言えます。

真民詩とわたし vol.42

『こころのうたかれんだぁ』の生みの親

鈴木出版 名誉会長 鈴木（すずき） 雄善（ゆうぜん）さん

「坂村真民の詩の世界を海野阿育の版画で表現してはどうだろう?」
今も多くの人々から親しまれ、愛されている「こころのうたかれんだぁ」は、真民詩の中に悟りを感じた鈴木出版社長（当時）のインスピレーションによるものだった。

◆真民詩と海野版画を出会わせた

私が坂村真民先生のお名前を知ったのは、昭和50年頃だったでしょうか。茨城県取手市にある弘経寺の境内で、真民先生の詩碑に出会ったのです。それは、『二度とない人生だから』七節のうち三節を自筆で書かれたものでした。この詩に心惹かれた私は「これは、どういうものなのか？坂村真民さんとはどういうお方なのだろう」と考えたわけです。

しばらくして、柏樹（はくじゅ）社の中山社長から真民先生の随筆集をいただきました。中山さんは、柏樹社を立ち上げる前に、鈴木出版の編集顧問をお願いしていた方です。その随筆集が昭和54年に柏樹社から発行された『念ずれば花ひらく』でした。

茨城県取手市 弘経寺にある詩碑『二度とない人生だから』

私はこの随筆集が大変気に入り、真民先生の詩を絵で表現できないだろうか？詩画集をだしたい、と考えるようになりました。そして「真民先生の詩の世界を、海野先生の版画で表現してはどうだろうか？」と思いついたのです。

海野先生は日本画を中心に学んだ方です。明福寺（東京都江戸川区）の住職さんの依頼で、寺の檀信徒向けに、法句経の文言を版画で記した「ダンマパダカレンダー」を作られていました。その出版を鈴木出版が引き受けたことからご縁ができていました。

昭和59年にお二人の最初のコラボ作品となる詩画集『自分の花を咲かせよう』を発行、昭和63年からは「心のうたかれんだあ」の発行が始まりました。真民詩と海野版画の出会いは私の発案、本屋冥利に尽きますね。

◆真民先生に感じた〝悟り〟

私が真民先生の詩に感じるのは、「悟り」です。お釈迦さまは出家ののち、厳しい修行を積んで「諸行無常」という悟りを得られました。

Everything is evanescent.
Nothing is constant.

漢文より、私は英語の訳のほうが原文の意味に近いように思います。真民先生は、すべてを見て詩という独特な方法を使って「悟り」を表現していると思います。

真民先生にお会いしたのは二度。一度目は最初の詩画集出版のご挨拶に、愛媛のご自宅へ伺った時。二度目は平成3年に、真民先生が公益財団法人仏教伝道教会から仏教伝道文化賞を受賞された時です。私は受賞祝賀会に同席し、詩についてやりとりをした事を記憶しております。

現生で悟りの境地に至るための6つの修行（六波羅蜜）があり、第一に挙げられているのが布施です。

「無財の七施」という言葉があります。財産がなくてもいつでも誰でも実行できる7つのお布施（身施・心施・眼施・和顔施・言施・床座施・房舎施）。真民先生は多くは語られませんでしたが、目に眼施（優しいまなざし）を、お顔には和顔施（穏やかな表情）が表れていました。真民詩に感じた悟りが、先生ご自身からも滲み出ていたと思います。

記念館からのお知らせ

坂村真民記念館の来館者が、10万人を超えました。

令和4年6月29日(水)の午前10時10分、隣町の久万高原町の高齢者グループ「しゃくなげ教室」の皆さん22名が来館され、ついに来館者が10万人を超えました。

10万人目の来館者となった黒田浩美さんは、真民詩の大ファンで、何度も記念館に来てくださっている方で、とても喜んでくださいました。
10周年記念特別展を開催している期間に、来館者が10万人を超えることになり、本当に嬉しい日となりました。

今後は、来館者20万人を目標に、さらに工夫を凝らして、多くの人が気軽に来てくださる記念館にしていきたいと思っています。

10万人目の来館者が決まる

佐川砥部町長より記念品贈呈

真美子さんより花束贈呈

記念写真

企画展のお知らせ

「坂村真民と家族の詩（うた）
～妻と3人の娘と紡ぐ家族の物語～」

開催期間 **2022年9月3日（土）～2023年2月26日（日）**

月曜日休館（祝日の場合は翌日）

9月3日から始まる「坂村真民と家族の詩」展では、「飯台」の詩と坂村家で実際に使われていた「飯台」を展示しています。

「飯台」の詩は、真民と家族のほほえましい情景を詠った詩として、真民詩のファンに最も愛読されている詩です。この詩は、真民が41歳、妻が33歳、長女梨恵子が6歳、次女佐代子が4歳、三女真美子が1歳の時の詩です。昭和25年4月、吉田での新たな生活が始まった時に書かれたのがこの詩です。

吉田での新しい生活がスタートする喜びと、新しい家での家族団欒の微笑ましい情景が目に浮かぶような詩ですね。本当にたった一つの飯台を買ったことが、こんなに子供たちにはうれしかったのだ、家族の幸せとは、こんなところにあるんだ、ということを感じさせてくれる詩だと思います。

坂村家で実際に使われていた飯台

この写真を撮った半年後に、
飯台を買ったのです。（昭和24年秋）

経営理念

最大の会社より最良の会社
人さまに喜んで頂く仕事と
自分づくりをする

ホテルクリオコート博多
〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街5-3 Tel 092-472-1111

株式会社 宣翔物産
〒812-0857 福岡市博多区西月隈3-6-17 Tel 092-475-1151

『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曽木材産業株式会社
〒399-5302 長野県木曽郡南木曽町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫
TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 http://www.nagiso.co.jp メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院

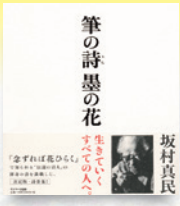
To-be
介護付有料老人ホーム
To-be
全78居室/20㎡～24㎡(1F&2F)

M To-Be
住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部
全18居室/40㎡～90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院西隣) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

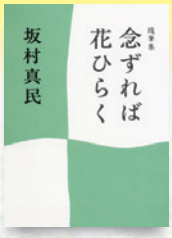
詩墨集 筆の詩(うた) 墨の花



●定価＝本体 3500円+税

坂村真民記念館所蔵の作品を満載！

随筆集 念ずれば花ひらく



●定価＝本体 1800円+税

初めての随筆集を復刻！

念ずれば花ひらく

詩集 念ずれば花ひらく

10万部突破の超ロングセラー！

いま届けたい、生き方の道しるべ

詩集 宇宙のまなざし

詩集 二度とない人生だから

詩集●定価＝本体各1000円+税

サンマーク出版
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
http://www.sunmark.co.jp

致知出版社 坂村真民シリーズ

全424頁、豪華座右版

生涯1万篇以上といわれる
膨大な詩作の中から366の名詩を精選。
長年、真民詩に魅せられ人生を歩む道標としてきた
『致知』編集長が渾身の思いで編纂に当たりました。
心が弱った時、悲しみに直面した時、
ぜひ本書を紐解いていただき、
心の糧となる詩に出逢っていただければと願っています。

坂村真民一日一詩

坂村真民＝著／藤尾秀昭＝編
定価＝本体2,000円＋税
四六判上製

人生で口ずさみたくなる言葉が見つかる

坂村真民一日一言
坂村真民＝著
定価＝本体1,143円＋税
新書判

円覚寺派管長が選んだ真民詩100選

坂村真民詩集百選
坂村真民＝著／横田南嶺＝選
定価＝本体1,300円＋税
新書判

真民氏が自らを励まし、勇気づけるために綴った87篇の詩

坂村真民箴言詩集 天を仰いで
坂村真民＝著／西澤孝一＝編
定価＝本体1,300円＋税
四六判並製

月刊『致知』に掲載された幻のインタビュー集

詩人の颯声を聴く
坂村真民＝著／藤尾秀昭＝聞き手
定価＝本体1,300円＋税
B6変型判上製

致知出版社（ちちしゅっぱんしゃ）
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-24-9
TEL.03-3796-2118 FAX.03-3796-2109

オンラインショップでもご購入できます！
致知オンライン で 検索

坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典	会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典	会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典	会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典	会員証で入館無料2人、観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧下さい 坂村真民記念館　友の会 検索

〈編集後記〉
夕闇が迫る頃、遠くから来た学生に対しローソクに火を灯し扉を開けて堂内に入れてくれたという昭和の始め、その約40年後、私の学生時代には拝観時間はありましたが、風渡るみ堂にて国宝級の仏様を拝することが叶いました。それから50年過ぎた現在、それらの多くは宝物館内に御座します。安心安全、一方で寂しさも。（真美子）

タンポポだより vol.42 秋号
令和4年9月1日発行
発行元／坂村真民記念館友の会事務局
〒791-2132 伊予郡砥部町大南705　坂村真民記念館内
TEL089-969-3643　FAX089-969-3644

［坂村真民記念館］
開館時間／9～17時（入館は16時30分まで）
休館日／月曜（月曜が祝日の場合は翌日）、12月29日～1月1日
入館料／65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、小・中学生200円　※15人以上の団体は割引あり